

光の経済回復(ローマ 16:25-27)

2025年、契約のみことばを握ってスタートすることができました。それを繰り返し、繰り返し刻印されるまで祈りつつ、そのみことばの成就を具体的に見る年にしていきたいと願います。そのために信者の私たちは、この地球のことを少し考えなければなりません。この地球には確かに終わりがやってくるようになります。地球は永遠に続くものではありません。必ず終わりを迎えるように定められています。そこまでのことを歴史と言います。その歴史の中心は福音宣教にあると、聖書は少しも迷わず宣言しています。世の中でそのように歴史を見る人は一人もいません。残念ながら、教会でさえこの地球の歴史、終わりが確かにあって、その終わりに向かって進んでいく歴史の中心が福音宣教にあると思っている教会はありません。だから、2025年という歴史がスタートしたレムナント教会の信者は、この歴史の中心は福音宣教にあるんだということを改めて確認しましょう。ならば、歴史の主である神様は、眞の福音を伝える教会、信徒に歴史を任せさせてくださいことに違いありません。ということを確認して、この年をスタートしなければなりません。つまり、信者は終わりがわかっているので、その終わりがあることを明らかにしてしっかりと握って、契約とその契約が全うされる御座の祝福に集中することで、その福音宣教の道を邪魔するすべてを超越する力を得るようになります。それで巡礼者としての人生を歩き、巡礼者の祈りに進むようになります。そして、そうならないといけません。理解できたでしょうか。教会はどのように祈るべきなのか。信者はどのような祈りが求められるのか。いくら祈ったとしても、神様が答えられる祈りでなければ、それは宗教と同じもので苦労するだけです。逆に「祈ったのに...」とつまづく材料になってしまいます。なので、正しく祈っていくことがすべてなのですが、そのためには終わりがあることを大前提にして、その終わりに向かって歴史が流れている。ならば、その歴史は何を中心にして動いて流れているのか。それが福音宣教に間違いなければ、信者の私たちはその福音宣教を中心にして祈り、そして、のためにさまざまな妨害があり、いろいろな邪魔、妨げが必ずあります。にもかかわらず、終わりが確かにあり、何が中心なのか、もう答えが出ているので、それに支障が起きないように全部を超越しないといけません。のような人を巡礼者と言います。そのときに光の経済を回復するようになります。経済を手に入れようとして与えられるものではなく、このように福音宣教という明確な契約、動かない結論をしっかりと握って、そして終わりを大前提にして、だからこそ何があろうがそれは邪魔になることはできないのです。それに引っかかってはいけません。正しいかどうかは 分別は必要でしょうけれども、それは私が引っかかって、そこにとどまってああだ、こうだというような項目ではありません。超えていかないといけません。それを巡礼者と言います。つまり、光の経済の回復は、巡礼者の祈りを捧げるときについてくるものなのです。今回、元旦のメッセージを受けて、光の経済の回復と言いながら、経済のことは何一つ言及していません。つまり、光の経済は、教会を生かす経済、宣教のための経済、次世代レムナントを育てるための経済、つまり、世界福音化の契約のために用いられる、ささげられる経済なのです。その経済は、一生懸命頑張って経済を貯めてそうしようではなくて、巡礼者として巡礼者の道を歩むために集中して祈っているときについてくるものなのです。だから光の経済の回復という契約を握った信者であれば、巡礼者の祈りをしていかないといけません。巡礼者の祈りは何でしょうか。先週申し上げましたように、残された者の祈りが基礎、バックになっていないと、巡礼者の祈りは成り立ちません。だから必ず2025年、レムナント教会の信徒ひとりひとりは、小さなレムナントから始め、年寄りの方に至るまで、ぜひ巡礼者の意識、自負をもって巡礼者の祈りに成功していただきたいと思います。

1. 残された者の祈りに成功し

- 1) 24(やぐら) 2) 25(旅程) 3) 永遠(道しるべ) 4) 平安の中幸せに祈る
- 5) 結果、残れる者、残る者、残す者として

そのために、第一、残された者の祈りに成功しつつ祈ることが巡礼者の祈りです。

だから、改めて残された者の祈りが何かを確認しないといけません。

残された者の祈りは何でしょうか。自分の内側に神様のやぐらが建ち、それで自分は神のやぐらなんだと

いう意識をもって、だからこそ神様が備えられた神の旅程を歩む者なんだ。その結果、神の目標であり、神様が実を結ぶ神の道しるべの答えを味わいつつ、その答えに向かって、目標に向かって歩む者なんだという、自分自身が誰なのかということを意識して、それを繰り返し、繰り返し、自分の中に刻印されるまで平安のうちに幸せに祈り続けること、それが残された者の祈りなのです。三位一体の神様が自分の内側にともにおられ、しかも永遠にともにおられて、神様がなさることは世界福音化なので、その神様が一緒にいらっしゃるから、神様と同じく世界福音化の契約を握り、神様は私に対して世界福音化のための絶対計画をもって導かれる方なんだ。私を通して。自分がそういう存在だということを繰り返し改めることなのです。なので、私を通して異邦人に福音の光が照らされて、病気の人に福音の光が照らされて、子どもたちに福音の光が照らされるようになるものなんだ。そのようなシステムが自分の中に設けられるようなものなんだ。三位一体の神様がそのために御座の力と祝福をもって私とともになわれる。それを祈るわけです。それを祈り続けることでやぐらができてしまうのです。そういう私なので、これから神様が伝道の答えを用意して導かれる、その契約の神の旅程を歩む者なんだ。だから、そのように導かれるように祈ることなのです。伝道の答えを用意して、すべてが答えとなり益となるように神様が導かれる、そのような道を歩む者なので、つまずくことも競争することも争うことなども一切いらない、そのような道を歩む者なので、そういう旅程を歩むようにしてくださいと祈ることなのです。あらゆるところに、全世界に、その結果、絶対光のやぐらを建てていくようになるんだと、それを目標にして祈り続けることなのです。自分はそういう存在です。なぜなのでしょうか。なぜアジア、ヨーロッパ、ローマ、237、5000未伝道種族の方に絶対やぐらを建てることができるのでしょうか。それを目標にして今やっていらっしゃる三位一体の神様がともにおられるから。それでない古い自分はもう死んでいて、今はキリストが内側に生きてらっしゃる。神様とキリストと一つになっている御子イエス・キリストのかたちとして回復されている者なので。だから、天にある靈的すべての祝福が与えられて、あなたがたは神の神殿であり、キリストのからだなる教会と言われ、あなたがたは世の光と言われ、王である祭司と言われる存在なので、それが刻印されるまで祈り続けることなのです。イエス・キリストを信じることは楽になったね、良いことあったねということではなくて、まるでサタンが見たときには、暗闇の世界から見たときには、モーセを見て神と勘違いしたように、私たちを神と見るようになることが救いなのです。なぜそれが可能なのか。三位一体の神様がいのちとして私たちの内側にいらっしゃるからです。そのことが刻印されて本当に自分が今日1日を生きるのに、自分ではなくて神が生きてらっしゃるような感覚になることがやぐらが建つということなのです。それを祈ることなのです。残された者は、自分はそういう存在だと気づいた者を残された者と言います。そのように祈りますと、残れる者になります。何があってもそれに揺れることなく生き残れるようになり、残る者になります。それで、結局、福音宣教のために身を捧げる最高の選択をする者になります。そして、これこそが地球の救いであります、神の願いなので、ずっとこれが続くように次世代にこのいのちの祝福を残す者になります。それが祈りの課題になります。その残された者の祈りに成功しつつ、その特徴は、集中というよりは、もちろん集中しないといけないでしょけれども、楽に平安のうちに幸せに祈ることです。楽に楽に、ずっと黙祷しながら、繰り返して繰り返して繰り返して。すぐに何かの変化が見られなくても諦めることなく、失望せずに、これを祈らないで何を祈るのでしょうか。完璧にみことばに、三位一体の神様の祝福に完璧にとらわれるまで祈り続けることです。自分がどんな人間なのか、周りがどうなのか、環境、状況がどうなのかが一切関係なくなるまでに祈り続けることです。あらかじめ答えを見ながら祈り続けることです。まだ皆さんがすべての道のりを歩んだわけではないのに、どこをどういう風に歩んでどうなるのかをあらかじめ見て祈ることなのです。それが残された者の祈りです。

2. 集中祈りに(靈肉の健康)

その祈りをしつつ、1日1回はそれに集中する祈りが求められます。

その理由は序論の方で申し上げました。超越しないといけないので、集中が求められます。特に集中によつて、靈肉ともに健康が与えられます。なので、巡礼者の道を歩んでいくためには、集中祈りが求められます。何にどういうふうに集中すべきなのか。残された者の祈りを繰り返し繰り返し、楽に感謝とともにずっと繰り返すことが大切なのです。そのうち一日一回は、何もかも遮断して集中する必要があります。御座の祝福に、神のみことばに集中する必要があります。キリストに集中する必要があります。何に集中すべきなのかというと、この残された者として巡礼者の道、伝道者の道を歩んでいくことに、自分の古い

人、サタンのやぐらが邪魔になるわけです。なぜ引っかかるかと言いますと、サタンのやぐらのままだからです。古い人がそのまま動いているので、それと状況と何かとぶつかると、それがつまずきになるわけです。つまずくようなことがあるからではなくて、いじめられるから、濡れ衣を着せられるからつまずくわけではなくて、それがつまずきになるしかないサタンの12のやぐらがそのまま残っているからなのです。

1) 捨てるべきものに集中-イエス様の公生涯

だから、巡礼者としてすべてを超越して神の目標に向かって突き進んでいく、何も問題にせずに進んでいくためには、捨てるべきものを捨てることに集中しないといけません。

イエス様が3年間の公生涯を通してなさったことは、あなたがたには捨てるべきものだらけなので、それを捨てなさいという話だったのです。だから、1日1回は向き合ってください。自分の中にサタンの戦略によってサタンのやぐらが建っていないかどうかを吟味しながら、それを捨てることに集中するわけです。サタンが作り上げたやぐらはなんでしょうか。自分なのです。神様は離れているので、神様がいらっしゃらないから生まれた罪の本性が何かというと、自分しかいないのです。そして、自分の考えによって動くわけです。いや、それはごく自然で当たり前じゃないのかと思うでしょう。神を離れて、神を失った結果なのです。忘れないように。私たちは生まれながら神様がいらっしゃるまますと生きてきたので、自分で自分の考えによって動くということが何が悪いのか、悪いことを考えずに良いことを考えればいいのではと思うのですが、それが罪なのです。自分の考えによって動くことが。そして、自分の願いをもってその願いのために頑張って生きていくこと、それがサタンのやぐらです。いや、願いを持つことがなぜ悪いのか。神様を失ってしまったので、神の願いがあるのに、それと関係なく自分の願いに縛られるということは、神の願いと無縁だという裏返しなので、それがサタンの落とし穴なのです。そこにぎゅっと人間を閉じ込めてしまいました。それで、そのことのために生まれた手段が何かというと宗教です。そして、ごりやくを求めることです。それから、一発の何かを狙うようなそういうシャーマニズム、占いのようなことはなぜ生まれたのかというと、神を失ってしまったので、とにかく神様に会えないようにするためのシステムとして生きてきたものなのです。その中の内容が健全なかどうかは一切関係ありません。神を離れていて神様に会えないように、悪魔サタンが悪霊どもを通して作り出したものが宗教であり、偶像崇拜であり、シャーマニズムであり、イデオロギーというものなのです。宗教は、宗教を持っているかどうかの問題でしょうけれども、宗教のいちばんの根幹というものは、人間、自分が神であり、人間、自分によってすべてが決まるという思想なのです。どれほど自分を磨いて人生を変えていくのかというのが宗教です。磨いて人生変えられると思いますか。神様を失ったということが何か分かっていないからです。だから、イエス様を信じて信者なのに、自分の中にこのような傾向やこのようなものがないのかということを吟味しないといけません。サタンは神様を離れた人間が、神様を抜きにして自分本位になるように、靈的なことは全く興味を持てなくて、肉のことによってすべてを評価するように、永遠の世界があるのに、神の国が幸せの根源なのに、この世界、この世中心にして人生の成功を図るように仕掛けているものなのです。そのような要素は自分にはないのか。そういうことがあれば巡礼者としての道は歩んではいけないです。その結果、教会に通っているのに、靈的なことに対しては全く鈍感で無知な状態で、いつも肉的なことで良かったのか悪かったのか、正しいかどうかを判断して、肉的なことによる心配、思い煩い、心の傷、恨みつらみ、妬み、憎しみというものを持つようになります。全部が肉体的な、肉的な理由なのです。そういうことはないのか。心の中には基本的に不安が支配します。肉体的なものが基準なので。なぜ不安なのかもよくわかっていないません。一緒にいらっしゃるべき神様と一緒にいらっしゃらないので、子どもの場合は親がいないから不安であって、ご飯がないから不安ではありません。そのご飯を備えて食べさせる親がいらっしゃらないから不安でしょう。それを知らずにご飯がないから、私はまだ幼いから不安などと勘違いするのと同じように、信者なのに心の中で理由も肉的な理由でいつも不安なのです。そういう傾向は自分の中にはないのか。それで自分がこれから生きていく理由、生きてきた理由、何のために勉強して、何のために就職するのか、その生きている理由、それは福音宣教とは全く関係ないものなのです。それが未信者の状態です。なのに、信者にもそういうことはないのかということ吟味しないといけません。願いが変わっていない限りは巡礼者としては最初から成り立ちません。もしかして死の恐怖にとらわれて生きている部分はないのか。そして、このような状態なので、これを子どもたちにも同

じ内容を教えて求めるわけです。子どもたちにも。私は自分の子どもたちに何を求めて、何を期待して、何を願っているのかということを吟味してみてください。それがサタンの戦略、サタンのやぐらであれば、それを捨てることに集中しないといけません。捨てることに。皆さん、今話を聞きながら、私はもう全部わかっていて、信仰が長いのでそれと関係ないかのように勘違いしていらっしゃるかもしれませんのが牧師にもあります。だから、集中しないといけません。適当に恵まれればいいや、これはそのまま放っておいて、ということはずつといたちごっこみたいなことになってしまうので、素直になって集中祈りをしましょう。大げさのように聞こえるかもしれませんが、このサタンのやぐらを捨てること、これは小さな場面でもその都度その都度しないといけません。弟子たちがオリーブ山の40日間の集中が終わったにもかかわらず、私たちの国はいま再興してくださるべきでしょうかと。サタンのやぐらがそのまま残っているから、彼らにはそれが当たり前に思われていたでしょうけれども、それを捨てなさい。その場面、場面、この捨てるべきものが何なのかに集中して捨てないといけません。1日を振り返って捨てるべきものがなかったかということを考えて捨てないといけません。

2) ミッション(神の計画)に集中-ともに約束後40日

なぜかと言いますと、その捨てるべきものを捨てないとミッションが見えてこないのです。ミッションというのは何かの働きというだけのことではなくて、必ず私の考えではなくて、神の計画があるはずなのです。つまり、集中祈りは、神の計画に集中することです。

誰かが悪いか良いか、正しいかそうでないのか、良かったのか悪かったのか、厳しいのかやりやすいのか等々にとらわれないで、神の計画は何でしょうか。それを問いかけないといけません。でも、捨てるべきものを捨てないとそこまでいけないです。だから、捨てるべきものに集中して捨てて、オリーブ山で40日間集中したように、ミッションに集中することです。人生全体においてのミッションがあり、その都度、その都度、神の計画が必ずあるはずなのです。それを問いかけるわけです。それに集中することです。ほかの何かに邪魔されないで。それが祈りです。

3) マルコのタラッパン(恵みを受ける準備)で集中-10日

そこで神の計画がわかったならば、マルコのタラッパンの集中になります。マルコのタラッパンは、ただ集中しましょうではなくて、このようなプロセスを経て、神の計画、ミッションを確かに握った人たちが、そのために神の恵みが必要なので、神様の力が必要なので、その恵みを受ける準備をしながら、それに向かって神の恵みを受けることに集中するときでした。そのような集中が求められます。

ぜひ2025年、1日1回は必ずこのように集中しましょう。捨てるべきものに集中して、神の計画に集中してミッションを見つけて…となると、ほかに何も引っかかることはありません。ミッションが見つかつたのでそれを握って、このミッションが成し遂げられることのために神の約束の恵みを求めるに集中します。

4) 礼拝に集中-講壇の刻印

そして、それがいつ具体的に実現されるかと言いますと、礼拝を通してその恵みが与えられます。特に礼拝を通して講壇のメッセージに集中して、講壇のメッセージをすべて暗記などは無理なのです。でも必ずこのように集中して祈っている人であれば、それに対して神様が必ずひとりひとりに神の御声を聞かせるはずなのです。それを聞いて、それが刻印されるように握って、繰り返し、繰り返し黙想しながら1週間ずっと神のみことばを握って祈ることなのです。つまり、礼拝に集中することです。

御座のキャンプが行われることを信じて。ただ皆さんが礼拝を通して、講壇のメッセージが皆さんのものになり、刻印されるまでいかない理由は、その前の集中がないからです。1週間ずっと捨てるべきものを捨てることができないまま、それと仲良くなってしまってずっと一緒に遊んできたまま礼拝に来るので眠くなるし。わかりますか。日曜日だけが聖日ではありません。ここは神殿ではありません。礼拝堂なのです。皆さんが神殿です。1週間どこにいても、いつでもこのように集中して祈れる存在です。集中しないといけません。前にも申し上げましたように、宗教的な意味で何かに集中すれば神秘的な何かが起こる、その結

果を期待するという意味での修行のような集中ではありません。私の内側にサタンのやぐらがそのまま動いているし、それを利用して目に見えないサタンが巡礼者の道を歩むことができないように邪魔していることが現実なので。だから私たちは集中するわけです。何のためでしょうか。残された者としての契約の道、福音宣教のための伝道者の道を歩むことに支障が起きないようにするために集中するわけです。

5) 現場に集中-みことば成就

このように皆さんが集中して礼拝に成功するようになれば、必ず皆さんの現場にそのみことばが成就することを見るようになります。

みことばが成就するということは、エルサレムから地の果てにまでわたしの証人となるとおっしゃったので、いのちの救いの働きがなされることを必ず見て体験するようになります。必ずなります。なぜなら皆さんの中側にいらっしゃる、皆さんを地獄から救い出したキリストは、三位一体の神様は、それをなそうとしていらっしゃるし、そのために皆さんとともにいらっしゃるのです。そのみことばの成就の体験のところまで持っていくために、私たちを内側からあらゆる面で整えられます。場合によってはひどい状況に遭遇させる場合もあるし、神様がなさることはそちらなのです。その目標が明確なので。ここまでが集中というものです。この集中ができる、現場でみことばが成就することにも集中しないといけません。みことばが成就するのに集中しないと、成就なのかどうかも分からぬままパスしてしまう場合があります。とにかくそこまでできた場合に、つまり暗闇の力が碎かれて、いのちの働きが行われるようになること、これがみことばの成就です。

6) 挑戦すべきことに 24、25、00

7) いるところ、行くべきところに答え見つけることに集中

それを体験したときに見えてくるのです。なるほど、どこに挑戦すべきなのかということが見えてきて、そのところに行くときに、そこに神様が既に備えていらっしゃる答えを見つけるために集中するわけです。

アンテオケ教会が断食をしながら周知したように。今この話はアンテオケだけではなくて、皆さんが現場で集中によって答えを味わった場合には、別のところに必ず目が行くようになり、門が開かれるようになります、ただ行くのではなくて、そこに神様がすでに答えを備えていらっしゃることを信じて集中するわけです。祈りつつ。なので、この集中に対してはいま聞いているだけだと思うんですね。前の集中による答えを経験していないので、今の話をしてもなかなかぴんと来ないかもしれません。でも必ずそのようになりますので、そのようにして神様はどんどん広めていいかかるわけです。

8) 道が塞がれる時、深い祈りに集中

その広めていかれるときに道が塞がれる場合があります。そのときにも、神の計画にこれっぽちも問題はありませんので、塞がれたことにとらわれて気にするのではなくて、深い祈りに入って集中するわけです。

そうすると神様が用意していらっしゃるところに道が開かれることになります。

9) ローマを前にマルコのタラッパンの再現に集中

目標はどこなのでしょうか。237、5000未伝道種族に向かうためのローマです。当時はローマ、今はローマがどこなのか、いろいろな考え方があるでしょうけれども、とにかくそのローマに門が開かれるようになりますが、そのローマの前でマルコのタラッパンが再現されること、それをそのままそこに植えつけるようになるですから、それに集中していくということが聖書に書いてあって見ることができるものです。このような集中によって巡礼者の道を辿っていくことになりました。何のための集中でしょうか。邪魔されないで、超越するための力をいただくための集中です。なぜ超越しないといけないのでしょうか。私たちは福音宣教という明確なミッションのために残された者として歩んでいくことなので、それが邪魔にならないように。巡礼者というのは何かを正しく理解しないといけません。皆さんがこのように

福音宣教という動かない神のミッションに向かって巡礼者として、その明確なミッションがあるからこそ、何が何でも一切それに邪魔されずに超越して、その契約の道を突き進むんだという意識を持っていればいいのです。それが巡礼者です。そのときに神様は、その巡礼者の道を歩んでいく人に光の経済を持つてこられるということです。それまでの経済はあっても光の経済ではありません。教会のためにささげられる経済です。なぜ教会のためでしょうか。このことを全うしないといけないから。宣教のために、レムナントのために用いられる、ささげられるような経済を光の経済と言います。レムナントの皆さんには、自分がこれから就職したり事業を開拓したりしてお金を儲けるようになるとすれば、今から私がお金を儲ける理由は献金のためなんだという釘を刺してください。良い車を買うためにお金を儲けるのではなくて、それはついてくるものでしょう。別に良い車が悪いわけではありません。ただ皆さんお金儲けるその理由、目的は一つしかありません。献金するためなのです。いまお金の話ではありません。自分の人生が残された者に間違いないく、巡礼者として生きることが間違いなければ、お金は何のために必要でしょうか。最初から自分は教会のために、宣教のために、レムナントのためにささげる。10分の1は献金ではなくて、神のものを神に返すことなのです。与えられたすべてが神から与えられましたという信仰告白なのです。プラス、宣教、建築、RUTCというものはそういう意味があるわけです。大人の方々はなかなか難しいのです。慣れていないから。レムナントは最初からそれをメインにして、どういうふうにささげるべきなのかということを定めて、それで祈りつつ導かれるべきです。皆さんが残された者の祈りをして、巡礼者として歩んでいることが間違いなければ。

3. 中心の回復(残りの人生)

1) 幕屋中心(モーセ) 2) 神殿中心(ダビデ) 3) 教会中心(ローマ 16 章の人々)

なので、光の経済の回復は、この巡礼者として集中祈りをしながら、残りの生涯、心の中心が 教会中心になるときに光の経済は回復します。

今申し上げました内容がそういう内容です。それを しっかりと理解するために、ローマの手紙 16 章に紹介されている人々のことをよく見て、見習うようにすればいいのです。それが教会中心です。伝道者パウロのために命を捧げますという人もいるし、教会の家主と言われてる者もいるし、同労者と言われる者もいるし。これを言葉をえますと教会中心にして生きてきて成功した人々の名前がそこに書いてあるわけです。そのときに光の経済を回復するようになります。皆さんの中心が教会中心になるときに、まるでモーセが幕屋中心であり、ダビデが神殿中心であったように、教会中心です。教会は何でしょうか。異邦人に光を照らして、病んでいる者に光を照らして、子どもたちに光を照らして、237、5000 未伝道種族に絶対やぐらを建てるためにあるものなのです。そのように教会を理解しないといけません。皆さんがイメージして理解している教会は正しい教会ではありません。皆さんひとりひとりが教会です。だから、皆さんに光の神殿の回復、教会に光の神殿の回復、現場に光の神殿の回復を契約として握って祈っていかないといけないし、そのことのために何かに引っかかって途中で下車すればいけないのでしょうか。神様は始めていらっしゃらないのに、もう終わりですよとなってはいけないのでしょうか。だから、自分は巡礼者なんだ。巡礼者は何がなんでも関係なく突き進む者を巡礼者と言います。そのために求められることは、集中の祈りなのです。1日1回は、今申し上げました内容に集中しましょう。特に、今の私たちの時刻表の中ではどこに集中すべきなのかというと、本当に聖霊様の恵みを求めつつ、素直になるように。自分の中に捨てるべきものが何か、道徳的に考えるのではなくて、そこに集中しましょう。本当にそこに集中した証拠が何かというと、ものすごい誤解があって、ものすごい気に入らない者がいるのにつまずかないで、神の計画は何でしょうかと問う方に行くようになります。必ずミッションが見えてくるので、それが裏では暗闇の勢力が碎かれる瞬間なのです。いつまで経っても未信者と同じように振り回されるようなことはもう終わりにしましょうというのが集中祈りなのです。すぐに結果が出なくても集中すること 자체が祝福なのです。皆さん、自分や環境、状況、人などに引っかかるところなく、それを下ろして御座の祝福に集中するわけです。自分自身も超えられるほど。今まで到底あの人間のゆえにもう生きていけないよと思っていたことが問題にならない。その人が変わるかどうかは私の気にすべきところではありません。それはあなたがたは知らないでいい。Only、だから集中する。なぜ引っかかるかというと、よく吟味してみると、サタンのやぐらが自分自身に気に食わないからです。自分がダメージを受けるから、そこに神様いらっしゃらない。神様はなぜ、何をと問うべきなのに、神様を離れていたものだったの

で、当たり前に自分中心なのです。なぜ憎むのでしょうか。なぜ心配するのでしょうか。自分の力がそこまでしかないから心配ではないでしょうか。神様はどこにいらっしゃるのでしょうか。信者なのに、もう救われて解放されているにもかかわらず、サタンのやぐらにずっと振り回されるわけです。だから、これから残された者の結論が出たので、神の絶対計画に向かって私は召されて用いられる者なのです。自己的ために生きる人生はもう終わりました。自分の願いどうのこうのはもうありません。神が一緒にいらっしゃって、神様と全く同じ道を歩むように召されている者なので、サタンのやぐらによって引っかかるなどはごめんだと。集中、集中です。

ぜひ皆さん、このような集中によって本当に光の経済が回復されることを見ておあかしできるようなことを祈りたいと思います。今、このような集中は三団体などによって世界中に広まっているし、イスラム教などはこのような集中をしています。このような集中ではありませんが、彼らの集中をはるかに超える集中なのです、私たちの集中は。それにより昔ロックフェラーに与えられた光の経済の回復の主人公になっていきたいと思います。経済に今いちばんのポイントを当ててはいけません。集中なのです。集中。経済はついてくるものです。

(祈り)

恵み深い父なる神様ありがとうございます。私たちが神の恵みによってキリストを信じて救われたのは、実は三位一体の神様が永遠に内側にともにおられて、御座の祝福をもって私を通して世界福音化の契約を全うし、特に私に対する計画を持って世界福音化に用いられる者になっていることを主が覚えさせてください。残された者の意識を持って祈りつつ、それを全うしていくために巡礼者の祈りを通して、集中の祈りを通して、超越して、福音宣教の道を揺れることなく、迷うことなく突き進むことによる光の経済の回復を見る能够性をもつて、祝福を与えてください。イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。アーメン。